

モデル事業名	西播磨の自然を活かした集落活性化モデル事業
活動団体名	にしはりまい き い き かい どう かつ せい かい きょう ぎ かい 西播磨生き生き街道活性化協議会
ホームページ	http://shiso-sns.jp/ http://sayo-chi.jp/
所属/ 担当者名	しそ 観光協会 会長 寄川 靖宏
連絡先	0790-75-2075 yorikawa@kza.biglobe.ne.jp
活動地域	兵庫県 宍粟市 山崎地域、一宮地域、波賀地域、千種地域、佐用町 豊福集落、金子集落

● 活動地域の概要

○宍粟市、佐用町は、兵庫県の北西部に位置。京阪神大都市圏から2～3時間程度の距離にあり、そのほとんどを森林が占める典型的な中山間地域である。

○人口の流出が顕著で、過疎化が進んだ地域になっており、集落そのものの維持が困難になっている地域も数多くある。

※10年前と比較した経済指標（8年度/18年度）

宍粟市 人口 90.6% 実質市町内生産 93.6% 年間消費販売額 78.6%

佐用町 人口 89.9% 実質市町内生産 89.2% 年間消費販売額 76.2%

※高齢化率

宍粟市 26.7% 佐用町 31.0%（兵庫県平均 20.5%）



【位置図】



【維持が難しくなりつつある佐用町の棚田】



【山の中に点在する宍粟市の集落】

● 活動地域の課題

○人口減少が激しい小規模集落（限界集落）において、大学生などの次世代の担い手を中心にする、自然・文化などの地域資源を活かしながら、交流訪問に加えて、地域 SNS、インターネットテレビなどの ICT ツールを活用した交流により、常時、お互いの顔が見え、つながりを意識できる持続可能な交流をめざす。

○平成 20 年度に、兵庫県内の地域 SNS 主宰者が「地方の元気再生事業」の採択を受け、地域 SNS を活用したバーチャルな交流と都市部の若者とのリアルな交流を織り交ぜた事業を実施し、先導的な取り組みとの評価を受けた。この取り組みの中で、農村部においては、都市部と一過性でない交流を図り、交流に農村部の若者（高校生など）も巻き込むことで、過疎が進展する中でも「誇り」に思える地域づくりを進めていくことが大事であるとわかった。

● 活動の内容

・平成 21 年度

（活動 1）地域資源を活かした交流の促進

平成 20 年にしそ 観光協会が中心となって選定した「宍粟 50 名山」を、ハイキング大会などの開催で都市住民との交流に活かす。また都市住民からの意見も聞きながら、山に関係する地域資源の掘り起こし、「いつでも誰でも活用できる」きめの細かい登山道を記録した電子マップの整備を行う。

（活動 2）若者が地域のことを「誇り」に思う地域づくり

都市部の大学生・高校生と、農村部の高校生（大学生がいないため高校生となる）による交流事業により、若者が自らの暮らす地域の良さに気付き、暮らす地域に「誇り」に思うことができるようにする。交流訪問に加えて、地域 SNS などの ICT ツールを活用することで、距離が離れていても、常時、お互いの顔が見え、つながりを意識できる持続可能な交流をめざす。

（活動 3）小規模集落の活性化、情報発信活動

小規模集落（限界集落）との具体的な交流を通じて、都市住民や若者の目から見た地域資源を発掘するとともに、小ロットでも販売が可能な地域 SNS モールを通じて販売することにより、集落の活性化を図っていく。
また野生動物（シカ、イノシシなど）被害への理解を都市部に深め、野生動物の駆除後の利活用を都市部—農村部の連携により行うことで、農村部の集落活性化につなげる。

● 活動の成果

● 平成21年度

(活動1) 地域資源を活かした交流の促進

神戸・明石・姫路より宍粟50名山にハイキングするバスを、11月より毎月第2水曜日に運行。1回50名定員で、参加者はのべ200人を見込んでいる。このハイキングで歩いたコースを、電子マップ、GPSナビを用いて記録しており、GPSデータを付与した写真とのリンクも検討中である。

また山岳ガイドに地元住民を加えることで、都市部―農村部交流につなげるとともに、ハイキング中の会話から都市部住民の意見を収集し、山に関する地域資源の発掘を行っている。

(活動2) 若者が地域のことを「誇り」に思う地域づくり

宍粟では、関西学院大学生がフィールドワークを2回行いのべ30名が参加。その成果として、若者視点による観光マップ「デートコースマップ」を地域SNS上に作成している。この過程で、地元の人も忘れていた縁結びの神(神社)が発掘された。今後は、宍粟市内のデートコースについて、山崎高校生にアンケートを行うことで、活動への山崎高校生の巻き込みを図る予定。

佐用では、佐用高校生徒会6名の復興への想いを、市立伊丹高校生(地元伊丹にて、商店街活性化活動に全校で取り組んでいる)、関西学院大学生、総勢15名で取材。交流を通して佐用高校生が、「佐用にレジャー施設は不要」「あいさつこそ佐用の誇り」などの気づきを得た。この意見はビデオ収録の上、佐用町復興計画検討委員会に提出し好評を得ている。

どちらも、地元高校生が都市部の若者と交流することで、自分の地域の良さに気づき、地域のことに目を向けるきっかけになったと、各方面から非常に高い評価を得た。

(活動3) 小規模集落の活性化、情報発信活動

佐用町金子集落で捕獲した鹿を、伊丹のレストランが看板メニューとして提供。すでに毎日新聞夕刊や、KANSAI Walker など5回マスコミに取り上げられ、佐用、伊丹双方に経済効果を生んでいる。レストランの常連客が佐用町金子集落に訪問する事例もあった。

また宍粟市波賀地区名産品を、地域SNSモールで販売中。都市部にファンを定着させている。



【宍粟50名山ハイキング】



【関学生の宍粟フィールドワーク】



【佐用高校生取材】



【伊丹レストラン記事(毎日新聞)】

● 今後の課題及び展望

・課題

宍粟、佐用は8月の水害により甚大な被害を受けた。

そのため、集落活性化のための都市部―農村部交流は、被害を受けた農村部の受け入れ態勢が整わず、プログラムの見直しなどが必要になった。

一方で、これまでのつながりが縁になって、関西学院大学の大学生が復興の一役を担うことができた。

都市と農村の高校生との交流もはじまったばかりだが、この活動を一過性に終わらせず、継続的に実施していくための工夫が必要である。

・展望

地域SNSを活用した都市部―農村部交流は、両者のつながりの継続に非常に役立ち、このつながりから様々な取り組みが我々も想定しないようなところで生まれている。そのために多岐にわたる波及効果も生じており、今後ともこの流れを継続したい。